

岩手県の 土地改良

2008(12月号)No.536

■発行所／岩手県土地改良事業団体連合会 盛岡市本宮二丁目10番1号

TEL(盛岡)019(631)3200 FAX(盛岡)019(631)3260

■編集発行人／川邊 賢治 ■印刷所／永代印刷株式会社

<http://www.iwatochi.com>

岩手山(八幡平市)



CONTENTS

- 農地、水は県民の共有財産 良好な管理で次世代へ ……2
- 国に対し平成21年度 農業農村整備事業の予算確保行動を実施 ……3
- 本県選出国會議員らに要請活動 ……3
- 「農業農村整備の集い」が開催される ……4
- 2008東北子供サミットin仙台が開催 ……5
- 農業農村整備技術強化対策事業一般研修を開催 ……6
- 水土里ネットいわて 今後の行事予定 ……6



農地、水は県民の共有財産 良好な管理で次世代へ

▶ 農地・水・環境保全推進大会

岩手県農地・水・環境保全向上対策地域協議会（会長：川邊賢治 水土里ネットいわて専務理事）では、11月19日、「盛岡グランドホテル」において「いわて農地・水・環境保全推進大会」を開催し、同向上対策に取り組む組織の代表者ら約750名が、基調講演や事例発表、パネルディスカッションなどを通じ、より効果的な取り組みへの理解を深めた。

挨拶に立った川邊会長は、「先人達が長い年月をかけて守り築きあげてきた農地と農業用水路は、四季折々の田園風景を作り出し農村を訪れる人たちに、潤いと安らぎを与えている。しかし、近年の農村地域の現状は、農業従事者の減少や高齢化、混住化等が進み、農家だけで管理していくのは非常に難しくなっている。このため、非農家を含めた、地域一帯となった保全活動を支援するため、同向上対策が平成19年度から実施されている。今日は、県内の特色ある取り組みについて事例発表があるので今後の活動の参考にしたい」と述べた。



【挨拶する川邊協議会長】

基調講演では、旧衣川村長で奥州市代表監査委員の佐々木秀康氏が「蟻（あり）の飯（まんま）」と題して講演。「我が国の基幹産業は農業であり、そのためにも我々は水を守っていかなければならない」などと体験談やユーモアを交えながら話し、会場の共感を買っていた。

次に行われた事例発表で、桜屋ユートピア自治協議会（矢巾町）事務局長 廣田光男氏が、安価で効果が長期間期待できる畦畔への除草シート張りをした事例のほか、アイみどり保全隊活動組織（遠野市）代表 菅原勝美氏は、地区内の子ども達を対象に水棲生物調査をした事例を発表した。また、水芭蕉の郷長志田地区活動組織（金ヶ崎町）代表 高橋義春氏は、カキ殻を使った用水の水質改善と農道補修の事例。二子地域環境保全推進会（北上市）会長 小館長純

氏は、豚ふん堆肥を使った土づくりや環境負荷の低減を図るための有機質入り肥料の活用、低農薬栽培の取り組み事例などが紹介された。



【事例発表する組織の代表】

パネルディスカッションでは、岩手大学農学部広田純一教授をコーディネーターとし、また、事例発表した4名の組織の代表者がパネリストとなり進められた。

パネリストからは、組織を立ち上げる際の苦労や地域の子どもの活動が少子化に伴い難しくなっていることなどが話された。

最後に、広田教授が「今後の活動として、環境向上活動のレベルアップが必要であり、昔の風景を取り戻すための取り組みがポイント」と話し大会を締め括った。

国に対し平成21年度農業農村整備事業の 予算確保行動を実施

▶東北・北海道土地改良事業団体連合会連絡協議会が6項目を要請

11月27日、東北・北海道土地改良事業団体連合会（会長：佐々木勝志宮城県土地改良事業団体連合会会長）では農林水産省及び農林水産大臣等に対し平

成21年度農業農村整備事業の予算確保に向けた要請活動を行った。

また、県別の要望において本会の舘澤宏邦会長は、現行の基

幹水利施設管理事業の採択に満たない中規模な農業水利施設に対する保全管理への支援制度の創設を要望した。

要請内容

1. 食料自給率向上に向けた担い手の確保と農地の有効利用の推進について
2. 活力ある農村地域づくりの推進について
3. 農業水利施設の計画的な整備・保全管理の推進について
4. 大規模な基幹的農業水利施設の計画的な整備について
5. 地元負担の軽減対策の推進について
6. 平成21年度農業農村整備事業関係予算の確保について

みんなで手をつなぎ守ろう乙女川

▶4小学校を含む20団体と奥州市、水土里ネットがアドプト協定締結

12月12日、奥州市胆沢区、同水沢区を流れる乙女川(小違堰)の清掃活動や水辺環境保全活動などを目的としたアドプト協定締結式が、乙女川周辺の各小学校の校長や児童、町内会長のほか、農政局や県などの来賓約100名が出席のもと、水土里ネット胆沢平野会議室で行われた。

はじめに挨拶に立った奥州市相原正明市長は「今日は、東北でもかつて無い規模の20団体が同時に協定締結する。

また、同地区では初めてとなる小学校との協定もあり、様々な活動を通して、教育や育成指導に大きな成果が得られるものと期待している」と述べた。

次に、水土里ネット胆沢平野及川正和理事長が「今日の協定締結により、この乙女川水路が、地域の皆さんと水沢を訪れる方々との心の架け橋となり、次世代までも愛され、親しまれる水路になるよう願っている」と挨拶した。

各団体と奥州市、土地改良区の代表者らが、協定書に調印。最後には、出席者全員が輪になり、小学校の児童の代表者らが「大人になったら、地域の皆さんと一緒に乙女川水路の清掃に参加したい。そのためにも今は、乙女川の学習を精一杯頑張ります」と誓いの言葉を述べた。



【誓いの言葉を述べる児童ら】

今回のアドプトプログラムは、奥州市立の若柳、南都田、水沢、常磐の4小学校が乙女川の全延長9.2kmを、また、水沢区内の石田西町内会をはじめとする16町内会は延長5.0kmの区間について奥州市、水土里ネット胆沢平野と協定を結ぶもので、市は清掃活動によるゴミの運搬処理、水土里ネット胆沢平野は活動における用具の貸し出しや消耗品の支給、アドプト表示看板の設置などの役割を担う。

「農業農村整備の集い」 が開催される

全国水土里ネット（会長：野中広務）では、農業農村整備事業及びその関係者の連携の重要性を訴える事を目的に、11月18日、日本青年館大ホールで、「農業農村整備の集い」を開催し全国から約1,000名が参加した。

はじめに、「ため池のある風景」写真コンテストの表彰式が行われ、最優秀賞をはじめ入賞者に対し、吹田 幌 全国ため池等整備事業推進協議会長より賞状等が授与された。

続いて、「パッテンライ!!!」という題名の台湾の農民を日照りから救うためにダム建設に尽力した日本人「八田與一」の生涯を描いたアニメ映画が、上映された。

集いでは、野中広務全国水土里ネット会長が「我が国の食料自給率は、4割という現状であり食料確保に大きな不安がある一方で、国内の農地は年々減少し、更には耕地利用率の低下や耕作放棄地の増大等、限りある貴重な農地が低未利用な状況にある。食料自給率を高めるためには、水土里ネットが守っている農地と水利施設が非常に重要

であり、より一層の高度有効活用を図らなければならない。そのために、国と地方、水土里ネット、農業者が連携し農地と水利施設の保全対策と更新整備を的確に行っていかなければならない。より良い農業農村を創るため、皆様の一層のご支援、ご協力をお願いしたい」と挨拶を述べた。



【挨拶を述べる野中会長】

議事は、吹田幌 全国水土里ネット副会長を議長に選出して進行し、中條 康朗 農林水産省農村振興局長が「平成21年度農業農村整備予算」の概要を報告した。中條局長は、「農業農村整備事業を巡る諸情勢は、農産物の逼迫と価格高騰で国民への食料の安定供給の大きな不安定要因になっている。このため、食料供給基盤である農地、農業用水の整備を推進していくとともに、担い手の育成と農地

の利用集積を更に促進していかなければならない。安全で安心して暮らせる農村づくりを展開していくために、今後も努力していきたい」と述べた。

続いて、伊藤 清明水土里ネット堺北部事務局長と黒沼和良水土里ネット南郷総務課長の両名から其々、耕作放棄地の解消や新しい生産基盤について意見が発表され、佐藤 昭郎 参議院議員からは今後の農業農村整備への提言が述べられた。



【提言を述べる佐藤参議院議員】

最後に、鈴木 規男 水土里ネットみえ専務理事が決議文を読み上げ、満場一致の拍手で決議を採択した。

2008東北子供サミット in 仙台が開催

▶ 「守り育てよう!ぼくらの水土里」をテーマに

11月29日、東北農政局主催の「2008東北こどもサミット in 仙台」が「仙台国際センター」において開催され、東北6県の代表小学校の生徒たちが、事例発表やパネルディスカッションを通じて、自分たちの在るべき故郷の姿を語り合うとともに見つめ直すことの大切さを訴えた。

代表校の関係者や一般来場者ら約500名を前に、中野拓治東北農政局農村計画部長が「今回のこどもサミットは、日頃食べている米や野菜がどのような環境で生産されているか、また、それと関連して自分たちの身の周りの‘水土里’をどうやって守り育てていくかを考える良い機会である。今日のこのサミットをきっかけに、農業・農村を見つめ直し、将来の担い手になっていただきたい」と挨拶を述べた。



【挨拶する中野農村計画部長】

続いて各県の児童が、自分たちの取り組みや体験したことなどについて事例発表を行い、本

県からは一関市立本寺小学校5年生の高橋萌さんと佐藤香伽さんの2人が「わたしたちの水・土・里～ふるさと本寺再発見～」というテーマで発表し、「水に川探検を、土に農園活動を、里に本寺の歴史調査を位置づけて学習してきた」と発表した。



【本県の高橋萌さん（左）と佐藤香伽さん（右）】

また、事例紹介では遠野ふるさと体験協議会アドバイザーの菊池新一氏が「出会い・ぬくもり・命輝き！永遠の日本のふるさと遠野」と題し、地元の小学生が農家に民泊し、貴重な農作業体験を行ったことを語った。

続いて、本寺小学校の生徒が、自分たちの故郷の農地が平安時代には“荘園”と呼ばれ、現在でもほ場整備が行われずに当時の姿を残している貴重な地域財産であることを、紙芝居「骨寺村の歴史」によって紹介した。

パネルディスカッションでは、コーディネーターに川村達先生（仙台市立高砂小学校教

頭）を、パネリストに菊池氏と渡辺哲氏（水土里ネット加美ほ場整備課長）を迎え、これに事例発表を行った児童12名が加わり「自分たちが暮らす地域の水、田んぼや畑、農村についてどのように思うか？また将来大人になったとき、どのような姿であって欲しいか？そのために、自分ができることは？」をテーマに意見交換を行った。

本県の高橋さんは、「私は、自分たちの住んでいる地域がとても大好きである。今後もここに住み、大人になっても今と変わらぬように清掃活動等を通じて、故郷を守っていきたい」と述べた。それに対して、パネリストの菊池氏が「自分たちの故郷を誇れるのは大変立派なことであり、そういう人達が増えてゆくことを願う。また、将来自分が大人になった時、子供や孫と次世代に伝えていく義務があることを忘れずに故郷を守って欲しい」と述べた。

最後に、小澤與宏 東北農政局整備部長が「本日の議題は非常に重要であり、今後も自分たちの故郷をより良いところにすることを、忘れないでいただきたい」と閉会の言葉を述べ、サミットを閉め括った。

